

強者の戦略

2026年度 京大日本史 第4問の(1) [問題編]

今回は2026年度の京都大学の第4問の(1)「摂関政治の特徴」を解説します。摂関政治に関する出題は他大学でもよくあります。今回は摂関家と天皇との関係と摂関家と中下級貴族との関係の両方に触れながら説明しなければならない問題となっています。ぜひチャレンジしてください。

Ⅳ 日本史探究問題

次の問(1)・(2)について、それぞれ200字以内で解答せよ。解答はいずれも所定の解答欄に記入せよ。句読点も字数に含めよ。

- (1) 摂関政治の特徴について、摂関家と天皇との関係、および摂関家と中・下級貴族との関係の双方にふれながら説明せよ。

「摂関政治の特徴について、摂関家と天皇との関係、および摂関家と中・下級貴族との関係の双方にふれながら説明せよ。」とあるわけですから、まずは摂関政治とは何か、次に、摂政とはどういうもので、関白とはどういうものかを確認します。そして、天皇家との関係や、中・下級貴族との関係も確認します。

では、まず摂関政治の特徴です。

摂関政治

- ①天皇の外戚となった藤原北家の氏の長者が摂政・関白として国政を主導した。
- ②重要政務は公卿が陣定で審議し、摂関家は人事権を掌握した。
- ③969年の安和の変以降は摂関常置となり、藤原道長・頼通の時に全盛期を迎えた。

摂政

天皇が幼少または病気などの時に代わって政務を処理する代行者。藤原良房以降の人臣摂政は令外官（厩戸王（聖徳太子）は皇族）である。

関白

成人の天皇を後見役として補佐する令外官。天皇に奏上され、あるいは天皇から諸司に下される一切の文書にあらかじめ目を通すことが職務である。

	摂政	関白
時期	天皇が幼少の時	天皇が成人の時
職務	天皇の政務を代行	後見役として天皇を補佐

強者の戦略

次に摂関家と天皇の関係です。

摂関家は自分の娘を天皇の妃（中宮・女御）として送り込み、生まれた皇子を次の天皇に立てた。天皇の親戚や母方の祖父（外祖父）として、天皇との血縁に基づいて国政における強力な主導権を維持した。

最後に摂関家と中・下級貴族の関係です。

中・下級貴族は自分の地位を維持・向上させるために、摂関家を私的な主君と仰いで奉仕した。彼らは私財を投じて摂関家の邸宅を造営したり、高価な貢ぎ物を贈ることで、希望する官職を得ようとした（成功）。摂関家は彼らを自らの家政機関に取り込み、政治的な手足として利用した。

となります。これを全部つなげてみます。

天皇の外戚となった藤原北家の氏の長者が摂政・関白として国政を主導した。重要政務は公卿が陣定で審議し、天皇や摂政が裁可を下した。摂関家は人事権を掌握した。摂政は天皇が幼少または病気などの時に代わって政務を処理する代行者で、関白は成人の天皇を後見役として補佐し、天皇に奏上され、あるいは天皇から諸司に下される一切の文書にあらかじめ目を通すことが職務であった。安和の変以降は摂関常置となり、藤原道長・頼通の時に全盛期を迎えた。摂関家は自分の娘を天皇の妃として送り込み、生まれた皇子を次の天皇に立てた。天皇の外戚として国政における強力な主導権を維持した。中・下級貴族は自分の地位を維持・向上させるために、摂関家を私的な主君と仰いで奉仕した。彼らは私財を投じて摂関家の邸宅を造営したり、高価な貢ぎ物を贈ることで、希望する官職を得ようとした。摂関家は彼らを自らの家政機関に取り込み、政治的な手足として利用した。

(399字)

200字を大きく超える字数ですね。これを少しずつスリムにしていきます。



天皇の外戚となった藤原北家の氏の長者が摂政・関白として国政を主導した。重要政務は公卿が陣定で審議し、天皇や摂政が裁可を下した。摂関家は人事権を掌握した。摂政は天皇が幼少または病気などの時に代わって政務を処理する代行者で、関白は成人の天皇を後見役として補佐し、天皇に奏上され、あるいは天皇から諸司に下される一切の文書にあらかじめ目を通すことが職務であった。安和の変以降は摂関常置となり、藤原道長・頼通の時に全盛期を迎えた。摂関家は自分の娘を天皇の妃として送り込み、生まれた皇子を次の天皇に立てた。天皇の外戚として国政における強力な主導権を維持した。中・下級貴族は自分の地位を維持・向上させるために、摂関家を私的な主君と仰いで奉仕した。彼らは私財を投じて摂関家の邸宅を造営したり、高価な貢ぎ物を贈ることで、希望する官職を得ようとした。摂関家は彼らを自らの家政機関に取り込み、政治的な手足として利用した。

(386字)

強者の戦略

黄色の部分が二重表現なので、まずこれをなんとかしなければいけませんね。



摂関家は自分の娘を天皇の妃として送り込み、生まれた皇子を次の天皇に立て、天皇の外戚として藤原北家の氏の長者が摂政・関白として国政を主導した。重要政務は公卿が陣定で審議し、摂関家は人事権を掌握した。摂政は天皇が幼少または病気などの時に代わって政務を処理する代行者で、関白は成人の天皇を後見役として補佐し、天皇に奏上され、あるいは天皇から諸司に下される一切の文書にあらかじめ目を通すことが職務であった。安和の変以降は摂関常置となり、藤原道長・頼通の時に全盛期を迎えた。中・下級貴族は自分の地位を維持・向上させるために、摂関家を私的な主君と仰いで奉仕した。彼らは私財を投じて摂関家の邸宅を造営したり、高価な貢ぎ物を贈ることで、希望する官職を得ようとした。摂関家は彼らを自らの家政機関に取り込み、政治的な手足として利用した。

(358 字)

ピンク色の部分の前に持ってきつつ、字数を削減します。



摂政は天皇が幼少または病気などの時に政務を代行し、関白は成人の天皇を後見役として補佐した。安和の変以降は摂関常置となり、藤原道長・頼通の時に全盛期を迎えた。摂関家は自分の娘を天皇の妃として送り込み、生まれた皇子を次の天皇に立て、天皇の外戚として藤原北家の氏の長者が摂政・関白として国政を主導した。重要政務は公卿が陣定で審議し、摂関家は人事権を掌握したので中・下級貴族は自分の地位を維持・向上させるために、摂関家を私的な主君と仰いで奉仕した。彼らは私財を投じて摂関家の邸宅を造営したり、高価な貢ぎ物を贈ることで、希望する官職を得ようとした。摂関家は彼らを自らの家政機関に取り込み、政治的な手足として利用した。(303 字)

もっと字数を減らします。摂関政治の特徴を述べるのであって、外戚とは何かを説明するわけではないので、外戚の説明は削ります。



摂政は天皇が幼少または病気などの時に政務を代行し、関白は成人の天皇を後見役として補佐した。安和の変以降は摂関常置となり、藤原道長・頼通の時に全盛期を迎えた。天皇の外戚として藤原北家の氏の長者が摂政・関白として国政を主導した。重要政務は公卿が陣定で審議し、摂関家は人事権を掌握したので中・下級貴族は自分の地位を向上させるために、摂関家を私的な主君と仰いで奉仕した。彼らは私財を投じて摂関家の邸宅を造営したり、高価な貢ぎ物を贈ることで、希望する官職を得ようとした。摂関家は彼らを自らの家政機関に取り込み、政治的な手足として利用した。(264 字)

水色の部分をもっとスリムにします。文章の順序も少し変えます。

強者の戦略



摂政は天皇が幼少または病気などの時に政務を代行し、関白は成人の天皇を後見役として補佐した。藤原北家が天皇の外戚として摂政・関白の地位を独占して国政を主導した。安和の変以降は摂関常置となり、藤原道長・頼通の時に全盛期を迎えた。重要政務は公卿が陣定で審議し、天皇や摂政が裁可を下した。摂関家は人事権を掌握したので中・下級貴族から私的奉仕を受け、彼らを家政機関に取り込み、代わりに希望する官職を与えた。

(198 字)

いかがでしょうか？ (安定のドヤ顔)

2026 年度 京大日本史 第4問の(1) [解答例]

摂政は天皇が幼少または病気などの時に政務を代行し、関白は成人の天皇を後見役として補佐した。藤原北家が天皇の外戚として摂政・関白の地位を独占して国政を主導した。安和の変以降は摂関常置となり、藤原道長・頼通の時に全盛期を迎えた。重要政務は公卿が陣定で審議し、天皇や摂政が裁可を下した。摂関家は人事権を掌握したので中・下級貴族から私的奉仕を受け、彼らを家政機関に取り込み、代わりに希望する官職を与えた。

(198 字)

今回は 2026 年度 京大日本史 第4問の(2)の解説をお送りする予定です。